

## 黄色い花

飯塚市 毛利 縫子

父の勤務している国鉄信号所の踏切を渡った先の病院に、自家中毒に肺炎を併発した3歳の弟「宏一郎」が入院していた。

まだ5歳だった私だが、信号所の周りに背高く咲いている黄色い花を背伸びし折って、弟の見舞いに持って行った。

父は筑豊炭田の、石炭輸送の拠点となっている駅の信号責任者で、臨時女子職員の指導もあって、兵役からは逃れていたが、病院を見舞う間は少なく、母がつききりで看病していた。

警戒警報が鳴ると、病棟下に掘られた防空壕に避難するが、弟は酸素吸入器をつけているので、母は病院から離れられなかった。たまりかねた看護婦が

「死んでも知りませんよ」

と、かなきり声で言っても、防空壕へ入るのは私だけだった。

警戒警報が解かれると、また病人や看護婦達が病室に戻ってきた。そんな事を繰り返した挙げ句、8月15日に弟はこの世をさった。

「お水、お水」

を、うわ言に繰り返し言うのを聞くに耐えない祖父は、

「どうせ死ぬんだ。腹いっぱい水を飲ましてやれ」

と母に言った。病人でなくてもすぐ喉が乾くのに、高熱に水も与えん治療法など、もつてのほかだと祖父は怒っていた。しかし、母は医師から禁止されているからと、一縷の望みを捨てきれず、とうとう一滴も飲ませなかった。

弟は、黒っぽい小さなうんこを一つして、息をひきとった。

8月15日に死んだ者を「団子からい」と言うらしく、棟梁で子供心にこわいと思っていたほどの祖父が、

「団子からいになってしまっ、可哀相に可哀相に……」

と言いながら泣いた。

弟は利発だった。色白で整った顔立ち、睫毛は長く、近所でも評判だった。

「こんな子は薄命というが、その通りになってしまっ……」

とも、祖父は言った。

病院は、死んだ者は裏門から出るしきたりらしいが、母は、

「この子が、玄関から出られんような、どんな悪い事をしたですか」

と、狂ったように看護婦に当り、死んだ弟を抱き上げると玄関から出ていった。私も母について出た。

私は、教材で、俳優の米倉斉加年さんが書かれた『大人になれなかった弟たちに』を指導する際に、その中のバスが通っているのに乗客に迷惑をかけるからと、死んだ弟をおんぶした母と三里の山道を歩いて病院から帰る場面が重なって、胸をしめつけられる。

一度、文化祭でこの作品を生徒自らの手で脚本に書き、舞台発表させた事がある。この場面では、会場のあちこちから、すすり泣きが聞こえ、生徒達も戦争は二度と起こしてはならないと強く思うし、食糧なども粗末にしないようになったと反省していた。

米倉さんは、弟のミルクを盗んで飲んだ良心の呵責に悩み続け、私の母は、好物のりんごを食べさせてやれなかったつらさで、今でもりんごを口にすると弟がでてくる。

それこそ、好物のりんごの1個も供えてやれない質素な祭壇に、例の黄色い花だけがひとかかえ飾られた。しかし、母はその時以来、黄色い花を嫌うようになった。

弟が死んで50年、その黄色い花を見かけることがなかったのに、篠栗路の農家の庭先で見かけた。

「おばあちゃんの、一番嫌いな花が咲いている」

と、私が突然言ったので、子供達は不審がった。

母の名前は「花枝」と言い、年をとっても「花ちゃん」と呼ばれていいねと、よく言われているが、花を育てて、小学校や中学校の花壇に球根をいく箱も贈るほどで、花を通しての交流が主とってよかった。そんな母の嫌いな花があったのだ。

私は幼かったのに、弟の死の顛末だけは、まるでフィルム化でもしているかのように、記憶にはっきり残っているので、一部始終を語った。

弟の死んだ年の暮れに生まれた男の子は、私が母の心痛を解せず、同じ名で呼んで付けた、二代目「宏一郎」であることも……。

戸籍はいい加減な事を許すと思うが、一人っ子と思っていた父も、幼くして死んだ兄と同じ「募」だった。

二代目の名前が、我が子にあってはならないと、四人の子供の命名の際に念じたが、鈴代、朋子、糸代、啓介と、平凡な名前健康に育った。

原爆記念日には全校あげて平和授業をするが、女教師の中で戦争を知る者は、私の勤める学校ではたった私一人となってしまった。

戦争を知らない三人の娘達は、中学校の教師をしているので、私同様平和授業をするが、資料に頼る説得力のない授業ではないかと案じている。

しかし、一生懸命に平和教育をしたつもりも、教え子が車を買うお金欲しさにPKOに行くと言ったと、ある女教師は講演された。

私も昨年、始めて沖縄を訪れた。地下壕の中に、自決を前に家族にあてた手紙が掲示されていたが、死を直前に小鳥や自然を書く心のゆとりを、さすが部下を率いる人物と感動していた。

ところが、戦火の写真の前で、若者が突然「コンバット」と言うなり、大声で映画のコンバットのテーマ曲を歌い出した。啞然とするだけで、怒りを若者にぶつけきらなかったのが、今も心にひっかかっている。

それにしても、母は80歳を越え、そろそろ老人性の痴呆が見られるが、まだ死んだ弟の年数えだけはしている。